

山本ひろ子『異神・中世日本の秘教的世界』

平凡社 1998年3月23日刊 686頁 7000円

リーチャヌ・ステファン

本書は、長年にわたって中世日本宗教の習合的次元を目指す研究を進めてきた山本ひろ子氏の最新著書である。書名から窺えるように、著者は中世という時間的範囲を中心に、智証大師円珍・慈覚大師円仁のような時の日本高僧によって大陸から輸入された形で来朝した新羅明神や摩多羅明神や牛頭天王など濫觴不明の「謎めいた靈格」に焦点を合わせつつ、その宗教的・儀礼的意義及び機能の解明を試みる。これら「神話の神でも、仏菩薩でもない、新しい第三の尊格」、即ち「異神」たちにかかわる諸史料と文献の丹念な分析を通じて各明神の集めた信仰とそれを支える社会的背景が明白に見える。ところで、本書は、著者が各章に於いてそれぞれの明神に関する文献を取り上げつつ、その解説に努めることを中心にするといった研究方法の産物である。一方では専門用語が点綴するこの研究はかなり狭い読者層向けのものであるが、他方では長い間研究対象にならず、見落とされてきたとも言える中世の外来神の有り様やその姿態変換メタモルフォーゼを説明しぬいたことで本書が中世の宗教的思想の理解に大きく貢献しただろう。以下に山本氏の解説に従って、「同時多発的に誕生・成熟し、連携、時には対立しあって暗躍した」異神たちの虚無縹渺たる神秘世界を考察していくことにしたい。

本書は以下のように構成されている。

第一章 異神と王権—頼豪説話をめぐって

I 【平家物語】頼豪説話の構成モチーフ

II 呪殺された王—後三条天皇崩御譚

III 頼豪説話の成立

IV 鼠の秀倉譚

付論 I 赤衣と老翁・赤山明神

付論 II 新羅明神来臨考

付論 III 新羅明神の幻像を追って

第二章 摩多羅神の姿態変換—修行・芸能・秘儀

序 謎の神・摩多羅神

I 叡山常行堂と摩多羅神

II 秘儀と摩多羅神—摩怛利神法と玄旨灌頂の世界

III 修正会のなかの摩多羅神—秘法相伝と摩多羅神の「顕夜」

付論 日光山の延年舞と常行堂

第三章 宇賀神—異貌の弁才天女

はじめに—「溪嵐拾葉集」

I 宇賀神経と荒神祭文

- II 「弁才天修儀」の儀礼宇宙一行法と口伝をめぐって
 III 弁才天灌頂—戒家相承の弁才天と如意宝珠をめぐって
 終わりに—「如意宝珠王」の彼方に

付論 戒家と大黒天—大黒天法と戒灌頂をめぐって

第四章 行疫神・牛頭天王—祭文と送却儀礼をめぐって

- I 「牛頭天王島渡り」祭文と祇園縁起
 II 津島の牛頭天王信仰と御葦流し
 終わりに—みさきたなびく牛頭天王…」

先ず、第一章を祖上に乗せて新羅明神の中世的展開を見てみよう。当章では、十世紀末頃、天台宗の山門（延暦寺）・寺門（三井寺〔園城寺〕）両派への分裂を背景に生じた仏法対王法の葛藤は「平家物語」などの史料に基づいて分析される。取り分け著者の注目を惹いたのは所謂「頼豪説話」である。この説話の中で、優れた神通力の持ち主である頼豪阿闍梨（三井寺の僧）は、皇子を望んだ白河天皇の命に従い、皇子の誕生を祈した結果、白河天皇の願望が叶えられる。そのかわり、褒美に何を望むかと尋ねられた頼豪は、三井寺戒壇建立の勅許を要請する。だが、山門派との摩擦を忌避しようとした天皇は頼豪の望みに耳を傾けなかった。この上もなく失望した頼豪は飲食を絶って餓死しようと決意する。頼豪が予告通り亡くなるや否や皇子（敦文親王）は重病に罹る。その時、皇子の枕もとに錫杖を持った白髪の老僧が周囲の人々の夢や幻に現れて、恐怖に陥らせた（これはいうまでもなく復讐を求める頼豪の霊である）。後にも怨霊となった頼豪の仕業は天皇と禁中の人々を苦しめ続けたが、詳細は別として一瞥したところではありふれた説話に見える「頼豪説話」のなかで何よりも注目すべきは三井寺の戒壇独立運動と王法との対立である。この問題こそは、頼豪と敦文親王の怪しむべき薨去との関連により表面化されている。だが、著者がはっきり指摘するように、このコンフリクトは、異神を通じて人間の世界（即ち「顕」の世界）を超越し、靈格的次元（即ち「冥」）にまで届く。具体例として、「我此ノ国ニ来ル事、唯智証大師ノ仏法ヲ守護セシガ為ナリ」（22頁）と自分の意図をあからさまに告げた新羅明神が後三条天皇の智証大師に対す軽蔑を知り、瞋恚の至り天皇に神罰を与える話は取り上げられる。一脈通じるものがなさそうに見える頼豪説話と新羅明神説話は、事実、興味深いかかわりを呈する。すなわち、錫杖を持った、白髪の老僧頼豪の風貌は新羅明神に酷似していると著者は示唆している。しかも、両者は王権を敵視し、寺門派の戒壇建立運動を忠実に支えた。かくて、異神の斡旋をもって、仏法・王法・顕冥の三つ巴の関係は中世日本の宗教的ダイナミズムを反映していると本書の第一章の中で論じられる。

さて、第二章では、天台宗系寺院の常行三昧堂に秘仏として祭られた摩多羅神の三つの異なる属性が取り上げられる。氏は諸文献—就中天台宗僧光宗著の「溪嵐拾葉集」—を検討しつつ、芸能神としての摩多羅神、天台宗の常行三昧堂の道場神（念仏三昧の守護神）としての摩多羅神およびげんしきやうきみやうだん玄旨婦命壇の本尊としての摩多羅神を描写する。著者の分析により幾つかの重要点が明らかになった。

第一に、少なくとも中世の天台宗黒谷流の法系において摩多羅神は、大黒天（摩訶迦羅）のみならず、ダキニ天とも習合的過程を経て同一視された末、両神の属性をまとうようになった。摩多羅神と大黒天の習合は、その名の発音類似性によるものである（またら摩多羅＝まかから摩訶迦羅）。次に、臨

終の者の内臓を食らうことで知られるダキニ天のイメージは、墓場に棲んで人の肉血を食らう恐ろしい神である大黒天のそれと中世叡山の宗教的空間において重複する。要するに、これら三神の相互関係が紆余曲折を経て多面価値的な宗教的次元を生み出すことは著者の主張するポイントである。

第二に、こうした摩多羅神は一定の性質を見せず、「仏堂の密室性を超出して、山岳という外部の修行の場へと躍り出ていった」(149頁)。その際、摩多羅神の適応性、あるいは融通性は一段と上がり、修行者によく知られている容貌(例えば天狗や白狐)をとるまでに至る。

第三に、摩多羅神の両面価値性をめぐって、著者は玄旨灌頂という「奇怪な儀式」のなかの摩多羅神の役割を解説する。秘密結社性格を帯びた玄旨帰命壇とは、「本来は日本天台に於ける神聖なる口伝法門として尊重すべきものなりしが、中古密教の邪義立川流の影響を蒙りて一種の淫祀邪教となり、叡山にて一時流行せし法門なり」(176頁)が、17世紀末に至るや厳しく弾圧され、ついに抹殺されたのである。一種のイニシエーション儀礼なるこの玄旨灌頂において、摩多羅神が三毒(即ち貪欲・瞋恚・愚痴)を象徴する同時に、菩提のシンボルでもあることによって、天台本覚思想「の理を体現する尊とみなされる」(199頁)。

最後に、著者は、多武峰と日光山と毛越寺とを天台宗系寺院として取り上げ、そこの「常行堂修正会で、最重要な本尊という高度にして演劇的な役割を担った摩多羅神」(210頁)について論じる。これらの寺院において摩多羅神は年に一度、修正会の夜に御殿から出御した。「摩多羅神の顕夜」と呼ばれるこの神々しい時期を、山本氏は委曲を尽くして描写し、その重要性を指摘する。

ところで、第三章の内容に簡潔に触れたい。この章の主題は、中世の中で「宇賀弁才天」という異神「とは何であったか、どのように信奉されたのか、を中世の叡山「山門」延暦寺における行法と言説を通して明らかにすることにある」(328頁)。著者は、宇賀弁才天の謎を闡明するために三つの面で論点を進める。まず、叡山文庫に現存し、叡山の宇賀神信仰のベースであった三つの日本偽経(所謂「弁才天三部経」)を検討する。第一経(『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠王陀羅尼経』)の中で、宇賀神の奇怪な風采(「頭に戴く宝冠の中には、眉毛の白い、老人の顔をした白蛇がいる」)(332頁)が窺がえる。しかし、何よりも留意すべきのは、宇賀神の説く神咒(いわば「宇賀神王法」)である。それを毎日百八編読誦する人は福德が得られるのみならず、魑魅魍魎や怨敵をも降伏できるという。この直截な発言に正当性を与えるため、釈迦自身が過去無量劫中に「貧女」であった自分と、自分に宇賀神王法を教えてくれた弗沙仏との出会いを語る。もちろん、そのお経によれば例の神咒を唱えた釈迦も大福長者となった。同様のモチーフ、すなわち「即身貧転福」という現世利益の思想は、宇賀神を中心とした残りの偽経をも貫き、宇賀神の主な機能を現す。

弁才天三部経における宇賀神像に光明を投じてから、著者は、謎に包まれた、詳しい伝記の伝わっていない謙忠という鎌倉山王僧に注意を向ける。この不思議な人物(入滅した謙忠が宇賀弁才天の眷属である十五童士の一人となって天空に飛んで去ったと言われる)は、『弁才天修儀』(十三世紀中頃製作)という聖典を著した。この書の下で、「叡山では宇賀神を本尊とする弁才天法が盛んに実修されていった」と山本氏が指摘するように、謙忠の著作は当時大きな役割を演じた。簡単に言うと、この聖典の内容は、複雑な唱文や印相を通して宇賀神の勧請を目的とする「ドラマティックな作法」(368頁)からなり、宇賀神の利益が広大であることを讃嘆するところも少な

くない。同時に、この傑作において密教の諸神を対象とする謙忠の言語ゲーム（山本氏は謙忠のことを「言語の師匠^{マエストロ}という」）によって宇賀神を中心とした非常に抽象的な思想基盤が生まれる。要するに、『弁才天修儀』の解説を通して氏は宇賀神の有り様を視察する。

最後に、宇賀弁才天の物語を取り上げた第三章は、いわば「弁才天灌頂」という儀礼の詳細な分析で終わる。

ところで、第四章は牛頭天王を中心に尾張国津島地方において湧いた信仰の特殊の性格・展開やそれに基づいた疫病送却儀礼を論じたものである。中世では、この地域が圧倒的な人災・天災を蒙ることによって人々の疫病に対する認識は非常に強かった。こうした時代において、多面的な機能を見せる牛頭天王が舞台に登場する。「祇園牛頭天王縁起」に見える牛頭天王の典型的イメージとかなり相異なる津島の牛頭天王の靈力（それは特に疫病を除去する）は所謂「牛頭天王島渡り」祭文に窺がえる。驚くべきことに、祭文によれば、この牛頭天王は、衆生救済のために身を滅ぼした釈迦の終焉について、「仏の御命まで取った」と言い、自慢した。この祭文は、一目瞭然牛頭天王の優位性を標榜したものであると同時に、この異神の二面的役目をも窺知させる。なぜなら、一方では、眷属としての八王子を通じて疫病を発生させる牛頭天王（祭文では、八王子は、疫神牛頭天王の機能を個別に担う行疫神という役割を与えられ、また鎮送されることで痛苦からの救済を保証する存在ともなる－538頁）は、他方では、祭文の神通力で人々を疫病から庇護するからである。山本氏の言葉で言えば、「釈尊をもとり殺すほどの恐るべき威力を揮う疫神・牛頭天王とその一統。彼らへの信奉は、疫病を鎮遏し送り出すことによって完結するという、パラドキシカルな信仰機制の上に成り立つのである」（555頁）。

以上、山本氏が試みた中世外来神世界の解説をめぐる最も意味深い面を取り上げた。ここまで見てきたように、各章では異神が個別に考察されるから、全面的に本書が統一性を欠いていると思われるかもしれない。しかし、そうではない。事実、それぞれの「異神」の性質を見てみると、たとえそれらの活動した文脈あるいは環境が異なるとしても、異神がただの「空華」ではなく、これらが当時の社会や特定の共同体のニーズ（三井寺の戒壇独立運動、避疾など）に応える機能を確実に担う存在であったことが分かる。本書にみえるように、摩多羅神を除いて取り上げられた異神のすべては何かの危機の背景に現われた神である。その危機を乗り越えるこそが「異神」という範疇の理論的基盤をなした要素である。従って、本書の最も大きなメリットは、山本氏が異神に関する史料を執拗に検討し、異神のこの特色を見抜くことができたことにあると思う。